

# インド NGO-JICA ジャパンデスク ニューズレター 2011年9月号

インド事務所よりナマステ！北インドはモンスーンの真最中です。今月号は2件の草の根技術協力事業地訪問記とインドのNGOについてお伝えします。

## 世界の人びとのためのJICA基金事業 インド福祉村協会 ～村人の信頼をあつめるドクターとアーナンダ病院～

「世界の人びとのためのJICA基金」の助成を受けて、インド福祉村協会は2010年11月から2011年7月まで、ウッタルプラデーシュ州クシナガルのアーナンダ病院にて「インド村民へのマラリア・結核・予防教育と治療の普及」事業を行いました。アーナンダ病院で10年以上にわたりボランティアとして関係が続けてこられた山野井純子さん（国際交流基金ニューデリー日本文化センター）にグプタ医師の診察の様子と10年の間の病院の変化について伺いました。

さとうきび畑の真ん中にポツンと建つ白い建物、それがアーナンダ病院です。医師1名、スタッフ12名がこの病院で働いています。

クシナガルの地でアーナンダ病院が10年以上も運営され、たくさんの村人が来院する理由は、グプタ院長（ドクター）の診察にあります。

「マンミーシー カエサー ハエ？」（お母さん、調子はどうですか？）

「アレ ドースト キャー フア？」（お～友達、どうしたんだい？）



アーナンダ病院外観



診察中のグプタ医師（右）と看護婦のウルミラさん（左）

診察の始まりは、患者の心を和ませる呼びかけから始まります。患者との距離を縮め、緊張をほぐします。そして、診察後には肩をたたき、送りだします。患者の病状をよく理解し、治療するためには、まず患者の心を開くことが一番大切だとドクターは言っています。毎日70～100人以上の患者に対して、10年間にもわたり心温まる診察を続けることが出来たのは、ドクターの医師という仕事に対する誇りとアーナンダ病院の院長であるという責任感にあると思います。信頼できる医師がいれば、患者はやってきます。バスと乗合タクシーを乗り継いで、2時間以上もかけて来院する人びと。近隣だけにとどまらず、遠方からもドクターの診察を求めて、病院には長い列ができます。その光景は、病院が開院してからずっと続いています。

ドクターの献身的な診察以外にも、変わらないことがたくさんあります。病院内はいつも清潔に保たれています。貧しい患者には鉄やカルシウム等の薬は無料で提供されています。薬の渡し方・説明の仕方も変わっていません。薬を入れた紙袋の上にボールペンで〇が2つ書いてあります。これは「1日に2回薬を飲む」という意味です。お年寄りの多くは字を読むことができません。そんな人にも分かるように、〇で薬の飲む回数を示します。若い人の場合は、説明が一度で理解できますが、女性やお年寄りの場合は何度も説明が必要です。説明が終わった後でも、しばらくしてから薬を片手に戻ってくることもあります。もう一度、薬の飲み方を教えて欲しい...と。そんな時にはスタッフが優しく対応します。



待合ホールでのマラリア予防教育

一方、この10年で変わったこともあります。初診料が少し値上がりしました。病院開院当時は2Rsだった初診料が、5Rsになり、今では10Rsになりました。病院を継続していくためには仕方がないことです。それから、救急車で患者さんの送迎が始まりました。アーナンダ病院は、メインロードから離れています。メインロードから病院まで、交通手段がないので歩かなければなりません。元気な人でも歩くと約15分かかるので、患者にとっては大変な距離です。そこで、救急車を使っての病院・メインロード往復送迎が始まりました。バスではなくて、救急車というのが少し変わっていますが、患者にとっては大助かりです。

救急車で患者さんの送迎を担当するジャイラームさん →



←アーナンダ病院の救急車

また、大きく変わったこともあります。病院に血液検査・尿検査、一般的な検査のための機材・エコーの設備が入りました。病院のLAB（検査室）が稼働し、検査技師が常駐するようになりました。今アーナンダ病院では、検査も病院内で行うことができるようになり、患者さんにも負担をかけず、診察が行えるようになりました。

アーナンダ病院ができてから10年たった今も、変わらないドクターの診察と改善されつつある病院のサービスがあります。今後もドクターの温かい診察が続く限り、アーナンダ病院は現地の人に必要とされる病院であり続けたいと思います。そして、現地の声に耳を傾けながら、日本側からもドクターはもちろん病院をサポートし続けることができたいと思います。1日でも長く、一人でも多くの村人に医療を提供し続けられるように。